

猿新聞

編集責任者
山村 準

tel:0595-63-1725

Email

yun.y@asint.jp

名張鳥獣害問題連絡会

発行部数

【全戸回覧】

錦生地区：100部

赤目地区：150部

箕曲地区：70部

ひなち地区：220部

つつじが丘：430部

【全戸配布】

国津地区：380部

市民センター：90部

(9地区)

名張市議会：20部

名張市役所：30部

集落柵を考える

近年、中山間地域を中心に獣害が深刻化しています。中山間地域は、過疎・高齢化を抱え、農耕意欲の減退による圃場の管理不足などで野生動物の餌場となつていきます。

野生動物はその本能に従い、安全な餌場を探しています。安全で餌が豊富という二つの条件がそろつと、そこが彼らにとって利用価値の高い場所となり、結果的に獣害が深刻化する要因となるのです。野生動物の被害を防ぐには、放棄果樹や廃棄農産物など、野生動物を誘引するものを除去する適正な管理が欠かせない重要なことである。



矢川集落柵
平成26年完成

しかし、集落柵には管理や開口部対策などのリスクがあります。

ここで、集落柵の来し方行く末を、未来のために、見つめ直し検証したいと思ひます。

個別に囲う柵だけでなく、複数の農地を囲うグループ柵や集落全体を囲う集落柵などがあります。最近では国の補助金などを活用して、集落全体を囲う集落柵を設置する地域が増えています。

原因は地域によって様々ですが、集落柵には水路や交通量の多い道路など完全に閉鎖出来ない箇所があるという点が最も大きな原因です。更に大きな問題点は、集落内での被害の差や住民意識の差が大きいなど、温度差があり、集落柵の来し方行く末を、未来のために、見つめ直し検証したいと思ひます。

現在普及している全ての防護柵では、野生動物の侵入を完全に遮断することは不可能。



集落柵が水の流れを阻害

管理については、設置後の地区の社会構造の変化や、それに反映した維持管理体制については、管理道の設置など議論を重ねる必要があります。

江戸時代、私たちの祖先は万里の長城を思わせる長大なシン垣を、集落の至る所に張りめぐらせて野生動物から集落を守っていました。

近年では、ワイヤーメッシュの「平成・令和型」のシン垣が、どんどん農村地帯に張り巡らされています。

矢川の柵は、山に深く入り込み設置されていて、柵内囲い込み状態で、昼間は人里側の藪に潜み夜間に人里に出る個体が多いらしい。

は、里山の環境や人間の生活様式の変化、個体数の増加や行動域の拡大、正しい知識に基づかない獣害対策などが考えられ、その原因は地域によって様々ですが、獣害の深刻化が中山間地域の集落を追い詰めて過疎に拍車をかけているのは事実。

アライグマ被害急増か

1980年、私が大阪から名張に移住したころ「あらぐまラスカル」というテレビアニメが放映されていました。子供たちにも大変人気のアニメでした。それからしばらくして私の家の近くでアライグマの赤ちゃんを飼っている人がいることを知りました。それがアライグマと私の初めの出会いでした。アライグマの可愛らしさは大変な人気で、ペットショップでも見られるようになりました。ペットとして飼われたアライグマは可愛さとは裏腹にその凶暴性のため飼育ができなくなりました。野生化し農作物に被害を与え生態系を破壊する恐れがあるため外来生物法により特定外来生物に指定され飼育、譲渡、輸入は原則禁止されており販売や、野外へ放つことは厳禁になっています。

建築物への被害

アライグマは人家に侵入をして子育てをします。人家の屋根裏や壁の隙間を利用することが多いようです。その時アライグマの糞や尿がたまると悪臭や尿により壁が汚されたりする被害が出ています。また侵入の際に外壁が傷をつけられたりもします。特にアライグマの出産時3〜4月ごろアライグマは1回の出産で3〜6頭を産みます。子供のアライグマは2か月後には生まれ場所から出たり入ったりします。1年近くたてば親から離れるものもいます。秋ごろには母親からはなれて独立するものが多いようです。アライグマは繁殖能力が高くメスは1歳でオスは2歳で繁殖出来るようになります。オスもメスも繁殖期以外は単独の生活をして

被害と生態

農作物被害

スイカ、トウモロコシ、ニンジン、イチゴ、ナスビ、果樹ではブドウ、ナシ、カキなどまた、小さな哺乳類やミズやカエル、サワカニ、魚、昆虫類など何でも食べる雑食性の動物です。ドッグフードを食べられたという報告もあります。

木登り上手

家の外壁の雨とゆをつたつて屋根裏に侵入します。また庭の木に登り人家に飛び移ったります。外壁に丸太

などを立てかけるのは禁物です。

前足が器用

アライグマは小さなものでも（ピーナッツなど）前足でつかんで食べるができます。



スイカを食べるときは、前足をドリルのように使い穴をあけそこに手を入れて中身だけを食べます。食べた後を見ればアライグマによる被害であることがすぐにわかります。

アライグマの特徴



アライグマは、全長60〜100センチ（尾の長さ20〜40センチ。縞模様があります。体重は4〜10キログラムです。顔にはアイマスクのような黒い模様があり鼻から額にかけて黒い筋があります。顔に白いひげがあります。指は長く5本あり人間のように分かれています。アライグマをこれ

以上増やさないためには

アライグマには日本の自然界には天敵はいません。人間が捕獲する以外にないのです。被害が起こらないための防護柵や人家への侵入を防ぐための対策が必要です。床下の空気穴を塞ぐとか、天井裏に入れない対策をするなどです。

人慣れさせない

可愛いからと言って餌を与えたりしてはいけません。人間を怖がらなくなります。

餌となるような物を放置しない

取り残した柿や野菜くずなどを放置しない。人間には不要なものでもアライグマには立派な餌となります。夜間に放置された生ごみも彼らにとって立派な餌となります。アライグマは雑食性の動物であることを忘れてはいけません。

名張市におけるアライグマの現況は、ここ数年アライグマの被害が増加しています。年間100頭以上までなっています。ここ3年間を見ても解るように、その数は年々増加の一途です。名張市では捕獲のための檻を市民に貸出し捕獲の協力をお願いしています。貸し出しの際に捕獲のための注意点等についての説明があります。アライグマは凶暴で

サルの行動調査 毎日、続けて18年！

あるだけでなく、アライグマ回虫の卵が糞に交じって排泄され人間の体内に入ると重度の脳障害を起こす恐れがあります。むやみに手を出すと噛まれる危険もあります。充分な注意の上で捕獲をしなければなりません。

文・田村 修市

今回は平成15年度から令和2年の18年間の名張地域のサルの行動をほぼ毎日調査した当時の出来事についてお話しします。平成15年当時は、現在の名張A群は名張C群と呼ばれていました。この頃の群れの管理は、基本的に三重県環境部が管理されてきました。当時、三重県職員によるサル情報共有システムが開発され、リアルタイムの情報が送信可能になり、農業者は携帯電話等で情報を得ることが出来るようになりました。それにより未然に被害防止をすることが可能になりました。このシステムは現在では、三重県管理



つつじが丘の猿と円内は今は亡き白猿



から現在のNPO法人サルドコネットの運営・管理へと変わっています。現在では伊賀地域で、およそ200名位が、このシステム情報受けサル対策に活用しています。情報受信希望者は、名張市農林資源室にお申し込み下さい。（電話番号 63・1725）

だからこの時点でこの地域では名張A群・名張B群の2群しかいません。但し、現在は他に青山A群、上長瀬の南には美杉C群が存在し現在名張周辺では4群が確認されています。私がサルの行動追跡調査を始めるきっかけになったのは、平成16年11月29日奈垣板屋辻の間付近で三重県が発信機を付けて放す対象のサルの捕獲檻に「白猿」が捕獲され、発信機をつけられるのを見学したことです。アルビノの突然変異の白色のサル捕獲は当時名張周辺では大きな話題になりました。当時「白猿」の推定年齢は15歳とされていました。捕獲後の作業として記録保管資料としての推定年齢・性別・出産経験の有無・体重・首周リ・座高・尻尾長さ（外来種の台湾猿を判別の為）・捕獲場所・発信機装着日・発信機周波数・血液採取・個体番号としての入れ墨を入れ（例、顔のそれぞれの場所に一の位・拾の位・百の位、千の位という風に発信機付けて）離されました。当日現場に国津小学校の児童数名が先生と一緒に見学に来ました。今回は以上です。文・写真 古川 高志

豚熱

野生猪 1頭陽性

三重県と名張市は、今年4月30日、滝之原で4月23日に捕獲された野生の猪1頭が、遺伝子検査で豚熱（CSF）に感染していたと発表しました。市内での感染確

認は初で、伊賀市内では4月30日までに計11頭の感染確認がされました。豚熱は人へは感染せず、感染拡大を防ぐために経口ワクチンを準備しました。

文・田北 利治

サル出没状況

名張A群は、青蓮寺湖・ひなち湖畔の桑の実などを食べ尽くし、農家の夏野菜に集中しています。上比奈知では一週間ほど滞在し夏野菜に大きな被害が出ています。この時期、自然界に餌が豊富にあるよう思われますが、木の実は実る秋までは比較的餌の少ない時期なので、今後は、農地から離れた自然界にサルの好む実のなる木を植樹するなど、サルとの棲み分け対策を考える時期ではないでしょうか。

